

歴史館

～第一章 体育会サッカー部までの道のり～

1921（大正10）年～1926（大正15）年頃

サッカー部の始まりは1921（大正10）年にまで遡る。故深山静夫氏ら（注1）が学内の有志を集めて「慶應ブルー・サッカー倶楽部」を創部。これが、体育会サッカー部の誕生となる。同年、「慶應アソシエーション・フットボール・クラブ」と改名。その頃のクラブを故松丸貞一氏（昭和7年卒）は次のように語る。

大正15年の出来事

大正天皇崩御

那須御用邸の完成

明治ミルクチョココレートの発売

神宮外苑に野球場完成

「僕の入学は大正15年。クラブは前年度選手不足のため東京カレッジ・リーグ（注2）一部の最下位となり、二部に陥落していた。だから僕のスタートは、クラブの選手で二部のリーグへ出場ということになる。クラブの創立は大正11年である。先輩は極めて少ない。また弱いクラブの面倒を見てくれるような物好きはいない。上級生にも

スポーツの心構えとかサッカーの戦術技術について指導してくれる人は皆無であった。伝統のない部共通のコースである。（中略）

役員は主将小池潔、副将は小西圭一、主務は島田巽の三氏で、新人のわれわれをいれて部員は14～15人位。練習は週に三、四回だが試合のほか全員そろったことは滅多にない。練習前日には三氏がそろってわれわれの教室まで出席の勧誘にまわって来て、またそのもの腰が馬鹿丁寧なので初めて奇異に感ぜられた。

それにグラウンドがなかった。ラグビーや軍教のない日に三田綱町を使った。都合の悪い日には青山師範へ“押しかけ試合”に行ったり、鉄製の移動ポストと太い縄をかついで芝公園までユニフォーム姿で歩いて行った。脱衣は近所の銭湯。遊牧の民のようにグラウンドをもとめてさまよった。話としては哀愁があって面白いが、実際にはおちつきがなく、また不便で困った。当日まで練習場所が決まらないことが多い。部員の出席の悪いのも無理のない環境であった。

主将は短期だったが責任感が強く、不振のクラブの建設に懸命であった。たまりは三田通り大和屋（フルーツ・パーラー）の二階、黒板がかかっていて練習場所や日時の指示がある。部費は月1円であった。ファイティング・スピリッツとフラタニティー（兄弟の愛、同期愛、友意などの意）がモットーだと教えられた。役員は懸命だが肝腎の部員は笛吹けどいっこう踊らない。主将はいつも冴えない顔色をし、いらいらしていて気の毒であった。

強く叱責すれば休みが重なり、自然にやめてしまうのである。ラウンド・キック、ドリブル、パスから始まってアタック・アンド・ディフェンスで終わる単調で形式的な練習であった。（中略）

秋が来て初めてのシーズンを不安と緊張の中で迎えた。そのころよ

うやく選手も11人そろうようになり、リーグ戦は幸運にも一つ一つ勝っていった。事実上の決勝戦というべき明大と青学に接戦したほかは日歯、商大、外語に楽勝して二部の優勝校となった。

個人の技術の総和と闘志が相手よりいくらかすぐれていた結果である。個人技のつながりで、2人のトライアングル・パスとスルー・パス位が精一杯。それ以上の組織プレイなどはない。勝敗はおおむねミスと偶然でできた。それでも主将の一年間の辛抱が実り、小さな優勝盃を手にしていささか男がたった訳である。基礎技術のうまいLW 豊田、CF 長坂は、LI 僕の両翼で盛んに得点しリーグ戦での新しいスターであった。（中略）

もし小池主将の忍耐がなかったら、また小名手豊田、長坂などとの出会いがなかったなら、慶應は確実にその年優勝できず、したがって一部に復帰できなかったであろう。そして二部に植物のように安住してしまったかも知れない。サッカー部前史の幸運な曲がり角であった。（中略）

25日に天皇が崩御し、元号は昭和に変わった。喪章を腕にまいて練習を続けた。六甲おろしの吹きすさぶ寒い神戸の合宿練習は、部としても僕個人としてもまだ少年期。曖昧模糊とした星雲の時代であった。」

注1：クラブ創立発起人＝深山静夫、範多竜平、下出重喜、千野正人、斉藤久敏

注2：創立当時一部＝慶、帝、早、高師、農、法 二部＝青学、一高、外語、商、明、日歯

参考文献：三田サッカー倶楽部 1978年 「サッカー部50年 風呼んで翔ける荒鷲よ」



現在の綱町グラウンド



東京カレッジリーグ 2部優勝時のメンバー



大正天皇崩御の新聞見出し